

江戸川乱歩『ぺてん師と空気男』論

宮 本 和歌子

はじめに

拙稿「江戸川乱歩『ぺてん師と空気男』と *The Compleat Practical Joker*」(平成二一年四月『国語国文』。以下「前稿」と略)において、江戸川乱歩『ぺてん師と空気男』(昭和三四年一月桃源社『書下し推理小説全集』第一巻)で使用されているジョークが、Harry Allen Smith 著 *The Compleat Practical Joker* (Garden City, N.Y.: Doubleday, 1953) に多く依拠していることを述べ、両者に共通するジョークの中から六つを選んで両者の異同を論じた。江戸川乱歩が成人向け作品として発表した最後の作品は昭和三五年一月の短編『指』だが、同作品は昭和三年『騒人』へ寄稿した小酒井不木との合作掌篇『ラムール』が原型であることから⁽¹⁾、少年向け作品を除外して考えれば、『ぺてん師と空気男』は実質的な最後の創作といえる。

新保博久・山前譲編『幻影の蔵 ―江戸川乱歩探偵小説蔵書目録―』(平成一四年一〇月東京書籍) 付属の CD-ROM には、*The Compleat Practical Joker* (以下 *Joker* と略) が複数冊登録されており、乱歩が *Joker* に強い関心を抱いていたことが容易に推測される。それを元に執筆された『ぺてん師と空気男』について、発表前に乱歩が、「こんどのは自信があるよ。カー式にいつた新しいアイディアであつて、殺人ゲームが主体になつている」と語っていたとの証言が『書下し推理小説全集』第一巻附録掲載の植草甚一「むかし乱歩さんを訪ねて」に存在する。加えて、子息である平井隆太郎氏は、小説は読むなどと言っていた乱歩が自著を息子に与えたことが二回だけあり、そのうちの一回が『ぺてん師と空気男』(以下『ぺてん師』と略)だったと述べ、これはある意味自信があったためではないか、と発言している⁽²⁾。こうした実例から、乱歩は『ぺてん師』にある程度の自信と思い入れを持っていたと推測される。

以上を踏まえ、本稿では紙数の関係から前稿で挙げられなかった残りのジョーク六つを紹介するとともに、乱歩とジョークの関係に言及する。

1 *The Compleat Practical Joker* と『ぺてん師と空気男』共通のジョーク

本章では、*Joker* と『ぺてん師』に共通するジョークを『ぺてん師』における登場順に挙げてゆく。引用は *Joker*、論者による和訳、『ぺてん師』の順で、括弧内の番号は、*Joker* から利用されている全一二のジョークのうちで登場する順番である。

1. 寺院の鐘を十三回鳴らすジョーク (5 / 12)

The clock in one of the university towers began performing in a most unusual manner. It would strike thirteen times at noon. At midnight it was content to strike the customary twelve times, but at noon there would be that extra stroke. The deviation was quickly noticed and an investigation was started. Clockmakers were called in to examine the mechanism. They couldn't make out what caused the thirteen strokes at noon. The bell itself was examined, but there were no cords, or other contrivances, connected to it. The thing went along for quite a while, a great mystery to be sure. It was solved by the villain's being caught in the act. He was a student, living on one of the upper floors of a house near by. Each noontime he sat at the window of his room with a rifle. The clock struck twelve and then, with perfect timing, the student pulled the trigger to create the thirteenth stroke. (*Joker* 74)

(ある大学の時計塔に、非常に奇妙な現象が起こり始めた。正午に、鐘が十三回鳴るのだ。夜中には通常通り十二回鳴るが、正午の鐘は一回多いのだ。人々はすぐに異状に気づき、検査が行われた。機械を調べるために時計職人が呼ばれた。しかし、正午に十三回点鐘する理由は不明だった。鐘自体も調べられたが、紐やその他の仕掛けはなにも装着されていなかった。大きな謎のまま、この現象はしばらく続いていた。だが、悪者が現行犯で捕まり謎が解けた。犯人は、近くの家の上階に住む一人の学生であった。彼は正午になると決まってライフルを構え、窓際に座っていた。時計の鐘が十二回打つと、絶妙のタイミングで引き金を引き、十三回目の鐘を鳴らしていたのだ。)

「きみ、お寺の鐘が十三時を打つて、近所の人を驚かせた話を知っているかい。昔の時の鐘じゃない。今の一時から十二時までをしらせる鐘だがね」「知らない」「これも外国の例だけど、実にウイットがあるんだよ。その寺の近所のやつがね、鉄砲でね、本当の鐘が十二点打つたあとで、鐘を的にして、タイムを合わせて、ポーンと一発やるんだよ。そうすると十三点鐘になる。なんの利益もない。大した害もない。しかし、近所の人には不思議に思わあね。ただ人を驚かせてみたいジョークなんだよ」(本文三八頁)

外国の例として、伊東がこのジョークのエピソードを語っている。*Joker* では大学の時計塔の

鐘であるが、『べてん師』ではお寺の鐘に変更されている。日本では時計塔の鐘より寺院の鐘の方が馴染み深いためか。

2. 理髪店に入り、巻尺や図面を広げるジョーク (6 / 12)

Accompanied by Dr. Miller, he would walk into, say, a large barbershop. Ignoring the barbers and the proprietor, Mr. Taylor would whip out a tape measure, a notebook and a pencil. He would begin measuring off the whole front section of the shop, jotting down figures, murmuring to himself or addressing his remarks to Dr. Miller. "We'll put the brick partition right through here," he'd say. "By the way, when they deliver the brick, have 'em back the truck across the sidewalk, take out this plate-glass window, and dump the stuff right in here. Make it easier. Now, let me see." By this time the proprietor of the shop would be moving in, wide-eyed and wondering. "Right across this section," Mr. Taylor would say, "will be the wall closing off the women's toilets." "Just a minute," says the proprietor. "What the hell's going on here." "Don't bother me now," Mr. Taylor would say irritably. "Don't bother you! the proprietor would yell. 'I'm the proprietor of this place—what the hell you think you're doing, anyhow?" "I'm simply working from the blueprints," Mr. Taylor would say, "getting the measurements for the alterations." "What alterations?" from the excited proprietor. "How do I know what alterations?" Mr. Taylor would say. "I'm only an engineer, working from the blueprints, taking the measurements. Now, let's see. I think the wash bowls ought to go right about here and..." "What about my lease?" the proprietor would roar. "I wouldn't know nothin' about your lease. I just follow orders and go according to the blueprints. Well, I think that does it. Remember about the bricks—dump 'em right through this window." And then Mr. Taylor and Dr. Miller would walk briskly out of the place. (*Joker* 262-63)

(ミラー博士と連れ立ちテイラー氏は大きな理髪店に入って行った。理髪師や店の主人を無視してテイラー氏は巻尺、ノートと鉛筆を取り出した。彼は数値を書き留めたり、一人でぶつぶつ言ったりミラー博士に話しかけながら店の前面部分を測り始めた。「ここに煉瓦で仕切りを作るんだね」と彼は言い、「ところで、煉瓦が運ばれてきたら、車の後ろを歩道に乗り上げて、このガラス窓を取り外して荷物をここに降ろそう。その方が楽だからね。どれどれ。」このとき、店の主人が不審そうに目を見開き寄って来た。「ちょうどこの部分に壁を作って女性用トイレにするんだ」とテイラー氏が言った。「ちょっと待て」と主人。「一体ここで何をする気だ。」「邪魔しないでくれ」と苛立ったテイラー氏が言った。「邪魔だって!」と主人が叫んだ。「私はここの持ち主だよ。一体あなたは何をしているんだ?」「私は青写真に従い作業しているだけです」とテイラー氏が言った。「改装のための測量です」「改装だって?」と興奮した主人。「知るものですか。」とテイラー氏が言った。「私は青写真通りに測

量し作業するだけの、ただの技師ですからね。さて、洗面台はここがいいかな……」「契約はどうなっているんだ？」主人が怒鳴った。「私は契約のことなんか知りません。指示通り青写真に従い作業しているだけです。ええと、これでいい。煉瓦を忘れないでくれよ。窓を壊してここに積むから。」それからテイラー氏とミラー博士は急いでその場を離れた。）

「ぼくはね、ここに建築設計図の青写真を持つている。きのう友達のとこで、不用なのを貰ってきたんだよ。それから巻き尺を用意している。こいつを使つて、一つジョークをやってみようか」「へえ。どんなジョークなの？」「まあ見ていたまえ。きみにもすぐ合点がいくよ。だが、さつきみたいにだんまりでなくて、もつと手伝つてくれなくちやこまるね。きみも適当に口を利くんだな」「だつて、トリックがわからなけりや、口の利きようがない」「いや、すぐわかるよ。きみも、もう相当のジョーカーになつてゐるんだから」町の片側に、赤と青のだんだらの飴ん棒が立つていて、一軒の床屋があつた。客は仕事椅子に一杯だつたが、待つてゐる人はないように見えた。「ここへはゐるんだよ」伊東は例の気取つた歩き方で、ツカツカとその店へはいつていつた。わたしもそれにつづいた。伊東は青写真と巻尺を手にながら、店主や職人を全く無視して喋りはじめた。「きみ、これをもつて、むこうの壁につけてくれたまえ」と、いつて、巻尺の一端をわたしにわたしたので、わたしはそれを引つぱつて、向こうの壁まで歩いて行き、そのはじを壁にくつつけて、じつとしていた。「ああ、ちやんと青写真に合つてゐる。そのまんなかへ、煉瓦で隔壁をつくるんだ。厚さは二十五センチと指定してある。ところで、煉瓦のトラックはまだこないのかな。一時という約束だが」と腕時計を見て「もう、その横丁のへんまで来ているかもしれない」「ねえ、きみ、煉瓦を入れるのには、この表側の大ガラスをはずさなくちやなるまいね」わたしも調子を合わせて、口をはさんだ。二人が人もなげに、大声で喋つてゐるので、職人も客も、みなへんな顔をして、われわれを見ていたが、隅の方で客の顔をあたつてゐたこの店の主人らしいのが、剃刃を手にしたまま、目を三角にして、こちらへやつてきた。伊東は構わず喋りつづける。「この青写真で見ると、煉瓦壁のそちら側は、婦人用のトイレットになるんだね」床屋の主人はたまりかねて口を出した。「あなた方、いつたいなんです。ことわりもなしにはいつてきて……」「いや、ちよつと邪魔だから、どいていてください」「なんだつて？どいてゐるだつて？わたしやこの家の持主ですぜ。それを、いつたい、あんた方あ、どうしようつていうんです」「いや、ぼくはね、ただこの青写真を引き合せてゐるんだよ。この店を改築するんでね。それを測量しているんだよ」「えつ、改築う？いつたい、どう改築しようつてんです」「そりや、ぼくにはわからないよ。ぼくは会社に雇われてゐる技師にすぎないからね。会社の出した青写真の通りにやるばかりだよ。で、きみ」と、わたしの方を向いて「手洗いをとりつけるのは、そのへんになるね。うん、もう少しこつちだ」「おまえさんがたあ、いつたい、だれに断つて、そんなことをやるんだね。あたしの承諾書でもあれば、見せてもらいたいもんだね」「承諾書だとか、契約書のことは、ぼくは知りませんよ。ただ会社の命令で働いてゐるんで

すからね。……きみ」と、わたしに呼びかけて「横丁へ煉瓦のトラックが着いたかどうか見てこよう。ぼくたちも手伝つてやる方がいいからね。いずれにしても、この表側のガラスはとつばらわなくちやあ……」そういつて、巻尺を巻きもどすと、わたしを促して、表に出た。「少し葉が利きすぎたかもしれない。さあ、早く行こう」そして、わたしたち二人は、スタスタと、逃げるように床屋の前をはなれたのである。(本文三八～四二頁)

ジョークの手法に大きな相違はない。抗議する店主に対する台詞の内容もほぼ同じであるが、『ペてん師』では伊東の発案したジョークのように書かれている。

3. 喧嘩を始めようとした相手が幼なじみであったというジョーク (7 / 12)

On another occasion Sothern was walking in Regent Street with Stephen Fiske. Suddenly Sothern suggested that they walk apart, and that they both enter the Atlas bus. When Fiske got on the bus he found Sothern sitting opposite him. Fiske didn't know what the scheme was, and looked questioningly toward his friend. Sothern immediately assumed a belligerent expression and said: "Are you staring at me, sir?" Fiske took the cue and responded: "No. If I wanted to stare at anybody, I'd stare at a better-looking man than yourself." At this remark Sothern appeared to go into an uncontrollable rage. The other passengers on the bus were a perfect audience for this sort of thing—a number of elderly ladies, two sedate gentlemen who appeared to be clergymen, a farmer from the country. Sothern leaped to his feet preparatory to attacking Fiske. The clergymen and the farmer rushed up and engaged in a violent struggle with him, trying to keep him from fighting. When they got the bellicose Sothern quieted down, he demanded that the bus be stopped and that Fiske step outside and take his medicine. "I prefer to settle it right here in the bus!" shouted Fiske, and Sothern went into an even more violent tantrum. He took off his overcoat and handed it to the nearest old lady to hold. "No man on earth," he howled, "can speak to me like that and live, with the exception of my good friend John Robinson of Philadelphia." "My name is Robinson," spoke up Fiske, "and my Christian name is John, and I have just arrived from America, but I don't happen to have the pleasure of your acquaintance, nor do I want it." Instantly Sothern's manner changed. He climbed over several of the other passengers and clasped Fiske in his arms, saluting him as his old friend from Philadelphia. He announced to everyone on the bus that this was his dearest friend, that this was one of the happiest moments of his life, and that he and John Robinson were now going out somewhere and celebrate. They left the bus arm in arm, having given the old women and the clergymen and the farmer something to talk about for the remainder of their lives. (*Joker* 120-21)

(またある時、サザンはスティーブン・フィスクとリージェント通りを歩いていた。突然サザンが、別々に歩いてアトラスバスに乗り込もうと言い出した。フィスクがバスに乗り込んだとき、サザンが彼の向かいに座っているのに気づいた。フィスクは彼が何を企んでいるのかわからず、不思議に思って向かいの友人を見ていた。サザンはすぐに喧嘩腰を装い、「私を見ているのか?」と言った。フィスクもすぐにそれを受け、「いいや。もし誰かを見るなら、もっといい顔の男を見るね。」と答えた。これを聞いたサザンは怒りを抑えられない風を装った。バスの乗客達は、こんな事件の観客としては最適の人々だった。数人の年配女性、聖職者風の生真面目な二人の紳士、田舎からやってきた農夫。サザンはフィスクに襲いかかろうと立ち上がった。聖職者達と農夫がすぐ仲裁に入り、とっくみあいを防ごうとした。彼らがいきり立ったサザンをなだめると、サザンはバスをとめてフィスクと共に下車し、懲らしめてやると言い出した。「おれは今ここでけりをつけたいね!」とフィスクが叫んだので、サザンは一層怒り狂った。彼は上着を脱ぎ、一番近くの老女にそれを預けた。「この世で俺にそんな口の利き方をして生きていられる奴はいないぞ、俺の親友の、フィラデルフィアのジョン・ロビンソンでもない限りな。」と喚びた。「俺の名はロビンソンだ。」とフィスクが言った。「それに俺の洗礼名はジョンさ。ついでにたった今アメリカから着いたばかりだ。だが、偶然にもあんたの知り合いの筈はないし、そんなこと望みもしないね。」すぐにサザンの態度が変わった。彼は大勢の乗客を押しのかけてフィスクの腕に絡みつき、フィラデルフィアからやってきた旧友に挨拶した。フィスクは最も大事な友人で今ほど幸せな瞬間はない、これから一緒にバスを降りてお祝いをするのだと、サザンはバス内に宣言した。老女達と二人の聖職者と農夫に後々までの話の種を提供し、二人は手に手を取ってバスを降りた。)

「きみ、きようは幸先がいいからね。こんどは一つ、二人で演技をやろうじゃないか」と、いい出した。「どういう演技? またどつかの店へ飛びこむのかい」「いやそうじゃない。こんどは、ちよつと大がかりなんだ。そして、どうしても二人でなければやれないジョークなんだ。それはね、バスの中でやるんだよ」「こんども、ほくはなにも知らないで、きみの助演をするのかい」「そいつはむづかしいだろうな。こんどは、きみが主役だからね。ちよつと打ち合せておかなくつちやあ」そして、伊東はその計画を、詳しくわたしに話して聞かせたが、こんどのジョークは甚だ手あらいやつで、しかし、なかなか舞台効果があるように思われた。わたしにその主役をやれというのだが、そんなお芝居ができるかどうか、心もとなく思つたけれど、まあやつてみることにした。そこで、二人は別れ別れになつて、近くのバスの停留所へ歩いていつた。そして、やつてきた一台のバスに乗りこんだ。バスの中はすいていたので、二人は斜めに向かい合つて腰かけることができた。停留所ごとに、客が降りたり乗つたりしたが、三停留所ぐらいすぎると、ちょうど頃あいの混み方になつてきた。時間が時間なので、半分は婦人客であつた。男も老人が多かつた。席は一杯になり、三、四人、あちこちに、吊り革をもつて立つていた。頃はよしと思つたのか、伊東は、向かい合つて腰か

けているわたしの顔をじつと見つめはじめた。わたしは笑いそうになるのを我慢して、ギョッと唇をまげて、ふてぶてしい顔を作っていた。わたしは、ひどく怒りつばい男に見せかけないと具合がわるいのだ。もう怒つてもいいころだと思つたので、わたしはやりはじめた。「きみ、なぜそんなに、ぼくを見つめているのですか。ぼくの顔になにかついているのかね」すると、伊東はすかさず斬り返してきた。「見つめてなんかいないよ。見つめるんだつたら、もつとまじな顔にすらあ」二人とも服装はちゃんとしているので、このよたもんみたいな口の利き方に、乗客たちは、びつくりしたようであつた。車内全部の視線が、わたしたちに集まつた。「なんだとう。やい、もう一度いつてみろ」わたしは激怒した顔つきになって、席から立ち上がつていた。「なんどでもいつてやる。おれは、そんなきたない顔、見つめた覚えはないよ」「うぬつ！」わたしは、顔を真赤にして、というのは、実はこの衆人環視の中のお芝居に赤面していたのだが、よそ目には、真赤になつて怒っているように見えたことであろう。そして、いきなり、相手につかみかかつていつた。伊東も負けてはいなかつた。すぐに立ちあがつて、応戦の姿勢をとつた。とつくみあいのはじまつた。近くの婦人客たちは、おそれをなして、車の前部と後部へ難を避けた。女車掌はポカンとして見ているばかりで、どうすることもできない。二人の男が、わたしたちのそばへかけよつて、引き分けようとした。「バスの中で喧嘩をはじめちや、こまりますよ。近所迷惑だ。やるなら降りてからやつてください」会社員風の分別顔をした男が、自分も怒つた顔になつて、怒鳴りつけた。「よしつ、それじゃバスをとめてくれ。……おいつ、きみつ、まさか逃げやしめえな。きみも降りるんだ。かたをつけよう」わたしは伊東の手を引つぱつて、バスの降り口の方へ歩いていつた。「このおれに、今のような口を利けるやつは、おさなじみのレンちゃんだけだよ。あいつなら、おれは怒りやしない。レンちゃんには久しく会わないがね」わたしは、なるべく不自然に聞こえないように、このせりふを言つた。ここが一番むづかしいところだつた。「ぼくも、子供のころレンちゃんと呼ばれていたよ。ぼくの名は伊東鍊太郎だからね」「えつ」と、わたしはびつくりして見せた。「君はレンちゃんだつたのか。伊東鍊太郎君だつたのか。なあんだ、そんならそうと、早くいつてくれればいいのに。ぼくは君を駅へ迎えに行つたんだぜ。わからないかね。ぼくは野間五郎だよ」「おお、五郎だ、ゴロちやんだつ。きみも変つたなあ。あれからもう十四、五年になるもんなあ」伊東君も、なつかしように叫んで、わたしに抱きついてきた。わたしたちは、あつけにとられた人々の前で、ロシア人のように、お互に抱き合つて、接吻せんばかりであつた。次の停留所で、わたしたちはバスを降りた。そして、人々の目を意識しながら、肩をくつつけ合い、腕を組んで、人通りの多い町を歩いて行つた。「どうだい。うまく行つたね。あのバスに乗つていた二十人ぐらいの男と女が、今の事件を生涯の語り草にするだろうよ。それにしても、きみも芝居がうまくなつた。あの調子なら、これから二人で、いろんな趣向が立てられるぜ」(本文四三～四七頁)

ジョークの手法に大きな相違はなし。外国の例か否かへの言及はなく、伊東の発案のように書

かれている。 *Joker* では Sothern は “Edward A. Sothern, the celebrated actor,” (114) と、俳優であることが明記されており、即興でのジョーク実演が可能だったのだろうが、『ぺてん師』では予め打ち合わせてからの実行という設定にしてある。

4. 測量の手伝いを依頼するふりをして通行人の時間を奪うジョーク (8 / 12)

The most celebrated of all British practical jokers was William Horace De Vere Cole, whose career will be considered in later pages. He was a citizen of substance and had a large house in a fashionable section of London. One day he was hanging some paintings in his home when he ran out of twine. He put on his hat and walked to the nearest stringmonger's shop and bought a ball of twine. On his way home he saw an elegant Englishman, a stranger, approaching. The man was so stiffish, so splendidly dressed, that Cole could not pass him by. Quickly he whipped out his ball of twine and stepped up to the gentleman. “I say,” he spoke with some show of deference, “I'm in a bit of a spot. We're engaged in surveying this area in order that we may realign the kerb, and my assistant has somehow vanished. I wonder if I could prevail upon your time for just a few moments. ” “To be sure,” said the stranger, ever the proper Englishman. “If,” said Cole, “you'd be so kind as to hold the end of this string. Just stand where you are, and keep a tight hold on it, and we'll be finished in a few moments. It's really quite important.” The splendid gentleman took hold of the end of the string and Cole began backing away from him, unwinding the ball. He continued all the way to the corner, turned the corner and disappeared. He proceeded, still unwinding the ball, until he was halfway up the block, at which point the string gave out. He stood for a moment, not knowing quite what he should do now. He had about decided to tie the string to a doorknob when Providence sent him a second gentleman, fully as elegant and polished as the first. Cole stopped him. Would the good sir be so kind as to assist him in an engineering project? Certainly! Cole handed him the end of the string and asked that he simply stand firm and hold it. Then Cole disappeared through an alleyway, hastened to the shop for another ball of twine, and returned to his home to resume hanging pictures. Cole never knew how long those two men stood holding the string. He could have circled back and spied on them, but he didn't even consider doing it. The more accomplished practical jokers seem to prefer a situation in which the denouement is left to their imaginations. They enjoy sitting down and thinking about what *may* have happened. (*Joker* 17-18)

(英国で最も有名なプラクティカル・ジョーカーはウィリアム・ホーラス・ド・ヴェラ・コールだが、彼の功績については追って考察する。彼は資産家で、ロンドンの高級住宅街に大邸宅を構えていた。ある日、家に絵を飾ろうとしたが、紐がなかった。彼は帽子をかぶり、歩

いて近所の店に紐を一玉買いに行った。帰り道、見慣れない上品な英国紳士がやってくるのを見つけた。非常に堅苦し気で、立派な服装だったので、コールはその人を看過できなかった。すぐに彼は紐の玉を転がし、紳士の前に立った。「恐れ入ります」と敬意を払い話しかけた。「困っているんです。歩道の再編成のためにこの辺を測量中なのですが、助手がどこかへ行ってしまいまして。ほんの少しお手をお借りできませんか。」「いいですよ」と見知らぬ紳士は本物の英国人らしく言った。「それでは、」とコール。「この紐の端を持っていたいただけますか。そこに立ち、紐をぴんと張っていて下さい。数分で終わります。とても重要な作業です。」立派な紳士は紐の一端を握り、コールは紐の玉を解きながら後ずさを始めた。角までそのまま進み、角を曲がって見えなくなった。まだ玉をほどこしながら進み続け、区画の半分まできたところで紐が尽きた。彼は、これからどうするかとしばし立ち止まった。紐の一方をドアノブに結びつけようと決めたとき、最初の紳士と同じくらい上品で完全な第二の紳士を紳が遣わした。コールは彼を呼び止めた。よき紳士なら、彼の土木作業を手伝わないはずだろうか？ やっぱり！ コールはもう一方の端をその紳士に手渡し、しっかり握って立っているように頼んだ。それから彼は歩いて姿を消し、もう一玉の紐を買いに店へ急ぎ、帰宅して絵を吊す作業を再開した。コールは二人の紳士がどのくらいの間紐を握って立っていたか知らない。その場へ引き返して彼らの様子を窺うこともできたが、そんなことはしようとも思わなかった。熟練したプラクティカル・ジョーカーほどその結末を想像に任せたがようだ。ゆったりと腰かけたまま、起こったであろうことを考えて楽しむのだ。）

i. 野間の目撃談

高いコンクリート塀にはさまれた町を、てくてく歩いて行くと、ふと、向こうに変なものが見えた。一人の中年の紳士が、妙な恰好でまごまごしているのだ。デブプリ太った、重役タイプの立派な洋装紳士だったが、その紳士が、手に長くのばした巻尺をもつて、なにかもじもじしながら、塀の角のほうへ、近づいて行くのである。紳士は外出用の服装で、簾のステッキを持ち、まだ新調したばかりらしいソフト帽をかぶっていた。その身なりで、巻尺をもつて、ウロウロしているのは、実におかしいのである。コンクリート塀から少しはなれた地面に、赤と白のだんだら染めの測量棒が立ててある。巻尺はその外側をまわつて、曲り角の向こうへ折れている。そちらの端も誰かが持つているらしいのだが、巻尺はダランと垂れていて、そつちの端を持つている人も、そろそろと、こちらへ近づいてくるらしい。なんとなくおかしい様子なので、わたしは遠くに立ちどまつて、それを見ていた。紳士はもうほとんど曲り角まで達していたが、すると向こう側から、目のさめるような綺麗なものが現われてきた。それは四十才前後の厚化粧の婦人であつた。どこかの奥さんであろう。外出用の盛装をしている。派手な花模様のある訪問着に、帯も丸帯をデンと締めている。手には流行型の大きなハンドバッグ。その盛装婦人が、巻尺の一方の端をもつて、なにか、怖わごわ、こちらをのぞく恰好で現われたのだから、いよいよ事態は異様である。紳士の方もおずおずと、塀

の角からのぞく、婦人の方も、おつかなびつくりで、角からのぞく。そこで二人は顔を合わせたのだが、二人とも、なんともいえない、酸っぱいような、にがつぽいような、へんてこな表情を浮かべた。二人が知り合いでないことは、一見してわかる。ますます異様である。わたしは、これはいつたい何事なのかと、好奇心を燃やしながら見つめていた。紳士の方が巻尺のケースを持つているのだが、巻き戻そうともしないので、目盛りをしたテープが道路にとぐろをまいている。そして、そのテープの両端を持った紳士と婦人とが、困惑したような顔を見合わしているのだ。「わたしを、いつまでも、こんなところに立たせておくんて、けしからんじゃありませんか。今の男はいつたい、どこへ行つたのです」紳士が真赤な顔をして、つめよつている。「わたしこそ迷惑ですわ。あなた、どこの方かしりませんが、さつきの男はあなたの部下でしょう。いそぎの用事があるのに、こんなもの持たされて、もう十分も、じつと待つていたのです。あなたは、わたしを、おなぶりになつて居るのですか」気の強い奥さんと見えて、なかなか負けてはいないのである。怒つて居るので顔がくずれ、人並みの顔なのだろうが、ひどくみにくく見える。「なにをいうんです。迷惑したのは、わたしの方ですよ。いつたい、あなたはわたしになんの恨みがあるのです」「あらつ、妙なことをおつしやいますわね。見も知らぬあなたに、恨みなんかあるはずがないじゃありませんか。あなたこそ、わたしをからかつていらつしやるのです。ほんとに、たちのわるいいたずらですわ」怒鳴り合つて居るうちに、二人とも、変だと気がついたらしい。お互に加害者でなくて、被害者だということがわかつたらしい。二人はしばらくのあいだ、だまりこんで、相手の顔を見つめあつて居たが、紳士の方が先に口をきつた。「どうもお互に一杯やられたらしいな」婦人は泣き笑いのような表情になつた。「それじゃあ、さつきの男は、あなたもご存知な人ですか」「そうですよ。あなたにもきつと、わたしと同じようなことをいつたのでしょう。これはひどい目にあつた。あいつ、もう遠くへ逃げてしまつたでしょうから、今さらさがしてもおつつきませんよ。お互にとんだ災難とあきらめるほかありませんな。アハハハハ……」「まあ、そうでしたの。ほんとうにひどい」そこで、二人はお互の立派な服装を認めあつた模様である。「あら、あたくし、つい腹がたつたものですから、失礼なこと申しあげてしまつて、おわびいたしますわ」「いや、それはお互ですよ。わたしはこういうものです。決してこんなバカなまねをする人間じゃありませんよ」紳士は太鼓腹のチョッキのポケットから名刺入れを出して、指につばをつけて一枚引きぬいて婦人にさし出した。「あら、申しおくれまして、あたくしも」婦人もふところから紙入れを出して、小型の名刺を差し出した。お互の名刺には何々会社専務取締役とか、何々婦人会会長とか印刷してあつたのであろう。二人は名刺を読むと、相手を見直したように、やさしい目を見交わして、アハハ、オホホと笑つた。それから小声になつたので、よく聞きとれなかつたが、二人は長い間立話をして居た。どうやら、共通の知り合いでもあつて、その噂をして、一層親しみを感じて居るらしく見えた。やがて紳士は、まだ手にしていた巻尺の革のケースに気づくと、長くのびた測量テープを、グルグルと巻き戻して、それを、なにか戦利品ででもあるようにポケット

におさめ、婦人とむつまじそうに肩をならべて大通りの方へ歩いていった。(本文四九～五三頁)

ii. 伊東による種明かし

「まあいい、時間を省くために、ぼくから話そう。ぼくは、なるべく人通りのない夕方を見すまして、あの大きなやしきのコンクリート塀の角へ行つた。そこへ赤と白に染めた測量棒を立て、両側の通りの角から二十メートルぐらいの地面に×印をつけてから、巻尺の革のケースを手にして待つていた。しばらくは適当な人が通らなかったが、やがて、あの重役肥りの紳士がやつて来た。むろん一面識もないんだ。服装がきちんとして、なかなか立派だつたから、この人がいいと思った。「ぼくは紳士のそばへ行つて、『ちよつと』」といった。『わたしは役所のもので、ここの道路工事の測量を命ぜられて、やりはじめたんですが、助手のやつがどつかへ行つちまいましたね。すぐ戻つてくると思いますから、ちよつとのあいだ、これをお持ちになつていただけないでしょうか』すると、紳士は、まさかいやともいえず『ああ、いいですとも』と答えたので、ぼくは、『この×印の中心にテープの端をあてててください』とたのんで、巻尺のケースをわたし、ケースから測量テープを引き出しながら、だんだん遠ざかつていつて、角の測量棒の外側からテープを廻して、曲り角のむこう側へ歩いていった。「はじめの計画では、そのまま、テープの端に石を重しにして地面におさえておいて、うちへ帰つてしまうつもりだつたが、そのとき、ちようどうまい具合に、むこうから、あの盛装の婦人がしずしずとやつてきた。むろん知らない人だ。ぼくはとつさに思いついて、テープの端を引っぱりながら、婦人に近づいていった。そして、さつきの紳士にいつたのと似たようなウソをついて、婦人にテープの端を握らせてしまった。この地面の×印の中心におしつけてくださいといつてね。そして、ぼくはさつさと、うちへ帰つてしまつたんだよ。……紳士がああ巻尺を戦利品として持つていつたそうだが、まあそれはジョークの楽しみへの投資として仕方がないね。「ぼくは結果を見ないで帰つてしまつたんだよ。いつもそうなんだ。その方が、かえつて興味津々たるものがある。あれからどうなつただろうかと、種々様々の場面を想像することができるからね。(以下略)」(本文六〇～六二頁)

ジョークの手法自体は同じだが、*Joker* では紐を買った婦りの咄嗟のジョークだったのに対し、乱歩は握らせる物を巻尺とし、測量棒を地面に立てるなど伊東による計画的な実行に改めている。『べてん師』からは二箇所掲出したが、前者はジョークの成果を目撃した野間による語り、後者はジョークを仕掛けた伊東による語りである。伊東の「ぼくは結果を見ないで帰つてしまつたんだよ。いつもそうなんだ。その方が、かえつて興味津々たるものがある。あれからどうなつただろうかと、種々様々の場面を想像することができるからね。」という言葉は、*Joker* 掲出部の“The more accomplished practical jokers seem to prefer a situation in which the denouement is left to their imaginations. They enjoy sitting down and thinking about what *may* have happened.”を受けたと思われ、伊東が“The more accomplished practical jokers”の一人であると印象づけるための

発言であろう。また、『ぺてん師』では被害者の一人を重役風紳士、もう一人を盛装婦人と変え、名刺交換をして親しく肩を並べ歩み去る結末を野間に目撃させ、ジョークの結末を描いていない *Joker* に対し、物語性を付与している。

5. 民間人宅周辺を混雑させ困らせるジョーク (9 / 12)

One day in 1809 Hook was strolling with a friend, Sam Beazeley, who wrote farces for the theater. They came to Berners Street, a small avenue famous in that time for its serenity. People of social importance lived in Berners Street because it was so quiet. Sam Beazely remarked on the peaceful aspect of the street. "I'll lay you a guinea," said Hook, "that within one week I can make this the most talked about street in all of London." The bet was taken on the spot and Hook quietly noted the name on the doorplate at No. 54. The house was occupied by a sedate widow named Tottingham. A couple of mornings later, before breakfast, a wagonload of coal drew up before Mrs. Tottingham's house. A van of furniture followed, then a hearse with a coffin and a train of mourning-coaches. Two important physicians, a dentist, and a midwife arrived in separate vehicles and now traffic was beginning to pile up. Into the street came a wagon carrying a pipe organ and six men to unload it and after them a load of beer in kegs. There followed a cartload of potatoes; plus coachmakers, clockmakers, carpet-manufacturers, confectioners, wig-makers, opticians and curiosity dealers, all bearing samples of their wares. And after them, an assortment of coachmen, footmen, cooks, housemaids and nursemaids, all seeking employment. Now arrived vehicles of greater elegance, carrying the Governor of the Bank of England, the Archbishop of Canterbury, a Cabinet Minister, the Chairman of the East India Company, the Lord Chief Justice, the Duke of Gloucester, and the Lord Mayor himself. Berners Street was bedlam. Carriages and wagons and carts were jammed together, their wheels locked, horses leaping about, and above all, the shriek and clamor of the indignant tradespeople, who began venting their rage on one another. Wagons were overturned and their contents scattered, some of the dignitaries were jostled and insulted, and across the way from Mrs. Tottingham's, concealed behind a curtain in a lodging house, Hook and Beazeley enjoyed the entire spectacle. The madness in the street continued throughout the day and a good part of the night, but when darkness fell Hook departed from the neighborhood, departed even from London, and hid himself deep in the country until public indignation died down. He had written hundreds of letters, signing Mrs. Tottingham's name, and he had lured the dignitaries to the scene by letters which hinted that the Berners Street widow was preparing to dispose of her fortune. (*Joker* 111-12)

(1809年のある日、フックは、演劇としての笑劇を書いた友人のサム・ピアズリーとぶらぶ

ら歩いていた。彼らは、バーナーズ通りでも閑静なことで当時有名だった界隈にさしかかった。とても静かなため、社会的地位の高い人々がバーナーズ通りに住んでいた。するとフックが言った。「一週間以内に、俺がこの通りをロンドンで一番騒がしい通りにしてみせる。でなけりゃ1ギニーやるよ。」この賭けはすぐに成立し、フックは54番地の表札の名前を密かに書きとめた。その家には、トッティンガムという名の生真面目な未亡人が居住していた。二日後の朝、まだ朝食も済んでいない時間に、荷馬車一台分の石炭がトッティンガム夫人宅の前へ運ばれてきた。トラック一台分の家具が続き、それから棺を用意した霊柩車と、葬儀用馬車の隊列がやってきた。有名な内科医が二人、歯科医が一人、そして助産婦も一人、それぞれ別々の乗り物で到着し、今や交通が混雑し始めた。パイプオルガンと、それを降ろすための作業員を六人乗せた荷馬車、その後には荷台に満載された樽入りのビールが通りに入ってきた。その次に大量のジャガイモ、続いて馬車屋、時計屋、絨毯製造会社、菓子屋、かつら職人、眼鏡技師、古物商が各々の商品見本を携えてやってきた。それから、御者、召使い、料理人、女中、乳母たちが大勢、雇用主を求めて集まってきた。さらに、英国銀行頭取や、カンタベリー大司教、閣僚大臣、東インド会社社長、首席判事、グロスター公爵、ロンドン市長が、もっと高級な乗り物に乗って到着し始めた。バーナーズ通りは大混乱に陥った。馬車、荷馬車、運搬車がひしめき合い、車輪がはまり込み馬は飛び跳ね、とりわけ憤慨して互いに八つ当たりをし始めた商人たちの悲鳴やわめき声のひどいこと。荷馬車がひっくり返し積み荷が散乱した。突き飛ばされ罵声を浴びせられた貴人もいた。フックとビアズリーはというと、トッティンガム邸から道を挟んだ反対側にある下宿屋のカーテンの陰に隠れ、この見世物の一部始終を楽しんでいた。路上の狂乱状態は、日が暮れて夜もかなり更けるまで続いた。だがフックは辺りが暗くなりだした時にはその近所どころかロンドンを抜け出し、公衆の怒りがすっかり収まるまで田舎の奥深くに身を潜めていた。彼はトッティンガム夫人名義でサインをした手紙を何百通も書き、バーナーズ通り在住の未亡人が資産を処理することをほのめかす手紙で貴人たちを大混乱の現場におびき出したのだった。）

「ところが、西洋のジョーカー伝を見ると、ひどいことをやっているやつがある。例えば、こんなのがある。ロンドンにでもニューヨークにでも、金持の住宅街というのがあるね。そこを歩いているんだ。そして、アトランダムに、表札を見て、番地と姓名を書きとめる。なるべく女主人公の家がよろしい。そして、その名で、方々の有名な店に、とんでもない品物の注文状を出すんだ。すると、大きな機械だとか、トラックだとか、全く家庭生活に関係のないようなものが、次々と配達される。むろん、そこの主人は受取らないだろうけれど、主人が留守だつたら、女中なんかは一応受取るかも知れない。いずれにしても商人とのあいだに大悶着が起こるにちがいない。そこがジョーカーのねらいだけれども、これはもう犯罪といつてもいいよ。(本文六三～六四頁)

『べてん師』では犯罪といってもよい悪質なジョークの例として、*Joker* と酷似したエピソードが伊東により語られているが、その目的は全く家庭生活に関係のない物を次々と配達させ、商人との間に大悶着を起こすことと説明している。一方の *Joker* は、閑静な高級住宅地を大混乱に陥れることが目的で、商人に限らず財界、政界、宗教界の大物なども多数呼び寄せている。

6. 探偵小説本の最初に犯人の名前を書き込んでおくジョーク (11 / 12)

Not long ago a woman in Germany went to court and asked for a divorce from the brute she had unfortunately married. She told the judge that her chief pleasure in life came from reading detective novels. Every time she brought home a new one, her husband would write the name of the murderer at the head of Chapter I. She got the divorce. (*Joker* 287)

(さほど昔のことではないが、あるドイツ人女性が法廷に行き、不幸にも結婚してしまった冷血漢との離婚を申請した。彼女は裁判官に、人生での最高の楽しみは探偵小説を読むことだと話した。新しい探偵小説の本を買って家に帰ると、彼女の夫は決まって犯人の名前を第一章の最初に書き付けるのだとも。彼女は離婚を勝ち得た。)

「西洋の長篇探偵小説さ。君も知つてるように、ぼくのうちでは、翻訳探偵小説の叢書は全部とつている。それを、この子もぼくも読むんだよ。ところで、ぼくはジョーカーのことだから、ちよつとしたいはずらをやつたんだ。どれもこれも、美耶子より先に、ぼくの方が読んじやつてね。その本の第一頁に、この小説の真犯人は誰々なりつて、大きな字で書きこんでおくのさ。「このいたずらは、西洋のジョーカーが、とつくに先鞭をつけている。ぼくはそれを、ちよつとまねてみたんだがね。やつこさん、やつぱりカンカンに怒つたね。西洋の例では、そのために離婚訴訟まで起こしているんだよ。どの本もどの本も、第一頁に種あかしがしてあつてみたまえ。探偵小説好きなら、離婚したくなるほど怒るのも無理はないよ。「だから、この子も、おれをバカツつて、どなりつけたんだ。そして、離婚話の近くまで行つたんだからね。探偵小説の恨みはこわいよ」(本文八九頁)

伊東は、外国に先例があるとこのジョークを説明し、彼が同じジョークを実行した結果、先例同様に離婚話の近くまで行つたと語っている。

2 ジョーカー・クラブの催しと乱歩の実体験

『べてん師』では、伊東主催のジョーカー・クラブ会合の一場面として、降霊術の様子が描かれている。「広い部屋の隅に、箱のような区切りをして、黒い幕をさげて囲み、その中で霊媒が椅子にかけ」、「見物の中の二人ぐらいが、そこへ行つて、霊媒の手と足を椅子に括りつけて、動

けないように」し、「黒いカーテンをさげてしまうので、霊媒は見物からは見えないように」した後、「電灯を消して、部屋をまつ暗にする。同時に、助手がレコードを廻して音楽を聞かせ」、心霊実験が行われたとある（本文九三頁）。その晩の実験では、「死人の声が聞こえたり、未来の予言が闇の中から響いてきたり、その他さまざまの奇蹟が行われた」とあるが、最も詳細に描写されている「奇蹟」を引用する。

霊媒がとじこめられていると信じられている黒幕と、見物とのあいだに、机が置かれ、その上に人形やラッパや長い紙製のメガホンなどがならべてある。机にも、人形のからだにも、ラッパにも、メガホンにも、みな夜光塗料が塗つてあつて、まつ暗な中でも、その形がハッキリとわかっている。その夜光人形がレコードに合わせて踊り出す。ラッパが空中に持ちあげられて、ひとりで鳴り出す。長いメガホンが、サーッと見物の頭をこして、うしろの方までのびる。そして、最後には、机そのものが、スーッと宙に浮いて、天井へあがつていく。生命のない物体が、ひとりで動くのだから、非常な不思議である。これらは、すべて縄抜けをした霊媒が、手で動かしているのだが、霊媒の姿は全く見えない。その部屋は窓には厚い黒幕を張り、どんな幽かな光もはいつてこないようにしてあるので、電灯を消すと、真の闇になる。（本文九四頁）

この描写の元になったと思われる心霊実験会へ乱歩が参加した様子が、『江戸川乱歩全集』第一七巻月報九（昭和五四年三月講談社）収録の奇術研究家・高木重朗による「乱歩先生と心霊現象」に記されている。昭和二五年一月一四日、ある出版社の主催で行われた心霊実験会へ乱歩が反対論者代表として参加、霊媒は当時の第一人者と言われていた人物であったという。実験の進行状況に関する高木の記述を、一部抜粋する。

実験会場は部屋の奥に神殿と床の間が並んでおり、その前に黒いカーテンで囲ったキャビネットがつくられていた。キャビネットの前には黒檀の座敷用のテーブルが置いてあり、その上に夜光塗料を塗った人形がのせてあった。（中略）霊媒が入室した。説明者のO女史が乱歩先生に霊媒をキャビネットの中の椅子にしばりつけてくれと頼んだ。先生は捕縄の研究をされているので、縄抜けをすると、元の状態には完全にもどらないような細工をした。（中略）キャビネットが閉じられ、音楽がはじまった。未完成交響曲である。室内の電燈が消された。部屋の中はまっくらになり、手先も見えない。しばらくすると、テーブルの上の人形が立って踊りはじめた。踊るといっても、ただ頭を持って振り動かしたような動きである。このあとメガホンが空中で回転したり、ペンライトが空中で字を書いたりした。ペンライトがテーブルの上に置かれた。すると突然テーブルが傾いて、その上に置いてある品物が投げ出され、テーブルが浮び上った。しばらくするとドスンと落ち、また上った。

会の後、こうした現象は霊媒が縄抜けをすれば霊媒自身での実行が可能であり、自ら結んだ結び目を暗中で探り、霊媒が一度縄を抜けていたことも確認したと乱歩が語った、と書かれている。起こった現象とその真相、夜光塗料を塗布した人形やメガホン等の小道具まで一致していることから、昭和二五年の心靈実験会での実体験に基づき、『べてん師』における降霊術の一場面を描いた可能性が高い。

3 乱歩とジョーカー精神

『べてん師』では、伊東が野間に対してジョーカーの性質があると指摘し、手品と詰め将棋と探偵小説が好きなのではと尋ねているが、当の乱歩も、探偵小説は言うに及ばず、手品と将棋も愛好していた。「探偵小説三十五年（三〇）」（昭和三年一〇月『宝石』）において、乱歩は「探偵作家と将棋」との章題の下、探偵作家仲間に将棋愛好家が多かったことを記すなど、将棋に言及することも多かった。手品に関しても、先述「乱歩先生と心靈現象」で、「新年会で奇術を御自身で演じたり、奇術大会に出演されたこともあった。」とあるように、その愛好ぶりが回想され、また自らも手品について書いた文章が多い⁽³⁾。『幻影の蔵 —江戸川乱歩探偵小説蔵書目録—』でも奇術、将棋関連の書籍が多数見られるが、乱歩の手品好き、将棋好きは、先の伊東の言葉と照らし合わせれば、乱歩自身のジョーカー的性質を示したものといえよう。

『べてん師』本文第九章「ジョークと犯罪」では、ジョーカー・クラブの面々を前に伊東がジョークと犯罪の関係を語り、「たとえば血圧の高い老人かなんかに電話をかけて、びつくりさせるようなことを話すとするね。それがもとで、血圧がひどく上つて、脳軟化症をおこして死ぬというようなことも、起こらないとはいえない。すると、これはもう殺人罪だからね。「ジョークと犯罪とは紙一重のちがいだよ。（以下略）」（本文六四頁）と続けている。これは、大正一二年一月『新青年』発表「恐ろしき錯誤」で「絶対に証拠を残さない様な犯罪」、大正一四年四月『新青年』発表「赤い部屋」で「少しも法律に触れる気遣ひのない殺人法」と形容されている犯罪と同種である。この種の犯罪を乱歩は「プロバビリティーの犯罪」と命名し、具体例を挙げた同タイトルの論考も残している⁽⁴⁾。

また、乱歩のデビュー作「二銭銅貨」（大正一二年四月『新青年』）は、松田道弘により「退屈しのぎにやる手のこんだ暗号ゲームを小説化したものです。日本最初のプラクティカル・ジョーク・ミステリといってもいいでしょう。」（『インファンテリズムのガラパゴス島 —江戸川乱歩のゲーム的世界』昭和五四年一月講談社『江戸川乱歩全集』第一五巻）と説明されている。「二銭銅貨」が「日本最初」のプラクティカル・ジョーク・ミステリか否かはさておき、デビュー作もプラクティカル・ジョーク的題材を扱っているとの見解に従えば、探偵小説に一生を捧げたと言われる乱歩には、一貫してジョーカー精神が流れていたといえる⁽⁵⁾。

乱歩が折に触れ探偵小説と落語の類似性を主張していたのは、伊東の言う「ジョークと犯罪とは紙一重のちがひ」を察知していたためであろうし、論考「プロバビリティーの犯罪」が発表さ

れたのが昭和二九年であることと併せて考えれば、昭和三四年の *Joker* 読了⁽⁶⁾ 後、ジョークの結果死に至った事例のような、悪戯の範疇を越えたジョークの数々⁽⁷⁾ を知り、悪ふざけや悪戯と犯罪の間に感じていた漠然とした類似に、明確な関連を見出したのだろう。この意味において、『ぺてん師と空気男』は犯罪の裏に潜むブラックユーモアをジョークという形式で表した、探偵小説に対する乱歩の精神を凝縮した作品といってよいのではなかろうか。

注

- (1) 『江戸川乱歩全集』第三巻（昭和三六年一月桃源社）の乱歩によるあとがきに、「日本版『ヒッチコック・マガジン』昭和三十五年一月号のために書いたショート・ショートだが、これの原型はずっと古く、小酒井不木博士と合作した『ラムール』という掌篇である。あれをさらに半分ぐらいに短くして、最後のスリルをもっと強くしたものにすぎない。その原型の『ラムール』は、昭和三年、たしか村松梢風氏の出していた『騒人』という雑誌に寄稿し、（以下略）」とある。
- (2) 平井隆太郎「回想の江戸川乱歩」（平成三年一月『オール読物』聞き手・岡崎満義）参照。以下に一部を抜粋する。「ぼくが小説を読むことを、父はあまり歓迎しませんでしたね。直接には言いませんが、母を通じて『小説は読むな』と言ってました。（中略）それでも父が本をくれたことが二回ほどあります。『これを読め』という意味でしょう。昭和二十年代の終わり頃、英語のラジオ講座で有名だったジェームス・ハリスさんが見えて、父の作品を翻訳する話がもち上がりました。（中略）これがタトル商会から出版されたのですが、この本を二、三冊くれました。もう一回は、戦後はじめて書いた『ぺてん師と空気男』をもってわざわざぼくのところへ置いていきましたから、ある意味で自信があったんでしょうね。」と語っている。最初に与えられた本は、*Japanese Tales of Mystery and Imagination* (Boston: Charles E. Tuttle, 1956. 書誌は『江戸川乱歩レファレンスブック3 江戸川乱歩著書目録』平成一五年三月名張市立図書館に拠る)と思われる。
- (3) 昭和二二年二月『オール読物』所収「探偵小説と子供心」にて、「子供は手品を好む。探偵小説も手品には目が無い。他人ではなくて親類である。ポーがメルツェルの将棋人形の魅力に抗し得なかつたやうに、どの探偵作家も手品狂である。」と記すなど。同随筆には、『ぺてん師』作中でも描かれている「マダー・パーティー」の名も挙がっている。なお、目次では「探偵小説と童心」の題名になっている。
- (4) 「プロバビリティーの犯罪」（昭和二九年二月『犯罪学雑誌』所収）。
- (5) 平井隆太郎氏は「父はあまり冗談が云えない人であった。相手の冗談に笑うことはあっても、自分から冗談を飛ばして人を笑わせることは殆どなかった。」「作品でも日常生活でも共にユーモア欠如的だった」（平井隆太郎「亡父乱歩とユーモア」、平成元年四月講談社、江戸川乱歩推理文庫64『書簡対談 座談』）と書いている一方、乱歩が漫画を特技としていたことに言及し、「父にユーモア表現の能力が全く欠けていたとも言い切れないと思う。」ともしている。
- (6) 『幻影の蔵 江戸川乱歩探偵小説蔵書目録一』CD-ROMのデータベース記事に拠れば、乱歩蔵の *Joker* の一冊に「34. 1. 6・・・荘に宿泊中読了」とのメモが見られるとのこと。
- (7) The practical joke which is most often used to illustrate the tragic implications of the business is the following: Two young men, named Joe and Bill, were out hunting on a hot day. They arrived at a farmhouse and Joe went inside to ask the farmer's permission to hunt on his land. Bill remained outside. The farmer told Joe it would be all right, if Joe would do him a favor. "On your way over to the

woods," said the farmer, "you'll pass through a field where there's a horse. He's old and sick and needs to be put out of his misery. Shoot him for me, and you can hunt all you want to on my land." Outside Joe said nothing to Bill about the horse and they arrived at the pasture. As they came close to the old horse, Joe suddenly began acting strangely. He rolled his eyes and wagged his head back and forth. "I think I'll kill that horse," he growled and, raising his gun, put a bullet into the animal's brain. Then Joe turned, swaying crazily, and said: "Now I think I'll kill you!" Instantly Bill raised his rifle and shot Joe through the heart. (*Joker* 52-53)

(いたずらによる悲劇的結末を例証するものとして最もよく挙げられるのは、次のブラクティカル・ジョークであろう。ジョーとビルという二人の若者がある暑い日、狩りに出掛けた。彼らは農場主の家に着き、ジョーは農場主の土地での狩猟許可を得るために中へ入った。ビルは外で待っていた。農場主は、条件付きで狩猟を許可した。「森へ向かう道の途中、一頭の馬がいる広場を通るはずだ。その馬は年老いて病気だから、その苦しみを取り除いてやりたい。どうかその馬を撃ち殺してくれないか。そうすれば、わたしの土地で好きなだけ狩りをしたいよ。」と言った。外に出てジョーはビルに馬のことを何も伝えないまま、二人は放牧場にやってきた。彼らが年老いた馬に近づいたとき、ジョーは突然奇妙な振舞いを始めた。目をぎょろつかせ、頭を前後に激しく揺り動かした。「あの馬を殺してやる」と怒鳴り、銃を持ち上げ、馬の脳髓に弾丸を撃ち込んだ。それからジョーは振り返り、正気を失ったように体を揺り動かしながら、「次はお前を殺してやる!」と言った。即座にビルは彼のライフルを構え、ジョーの心臓を撃ち抜いた。)

というジョークや、火のついたマッチをうなじに近づけたところ、被害者が運悪くアルコール含有のトニックを大量に髪の毛に塗っていたため一瞬にして引火してしまったジョーク (*Joker* 48) 等。

付記 『ぺてん師と空気男』の本文は初出の書き下ろし単行本に拠り、ルビを適宜省いた。